The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	後期近代英語期における「promise＋目的語＋to不定詞」と「promise＋目的語＋that節」の交替について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2020, 44, p. 61-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99444
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

後期近代英語期における「promise＋目的語＋to 不定詞」と「promise＋目的語＋that 節」の交替について

大津　智彦

1　導入

1.1　調査の目的

筆者は2000年前後から次の（1 a）のように「promise＋目的語＋to 不定詞」の形をとる構文を容認せず、（1 b）のような「promise＋目的語＋that 節」の形をとる構文を選択する母語話者が多いことが指摘され始めていることに注目し、大津（2019）おいて promise が目的語をとるときの補文構造の歴史的変遷全体を明らかにする一環として、まずはその起源を確認し、両構文が現れる最初期に当たる初期近代英語期における実態をコーパスを用いて調査した。

（1）a.　Sam promised me to get some food.
　　b.　Sam promised me that he would get some food.

その結果、①「promise＋目的語」に続く補文節は最初期から不定詞節が過半数を超えるくらい高い頻度で現れる、②不定詞節の頻度はその後も増加し続け、初期近代英語期末（1710年）までに8割以上を占めるようになる、③これらのことから、母語話者において不定詞節の容認度は高かった、といった点が判明した。今回の研究では前回に続く時代、つまり後期近代英語期

においてどのような発展が見られるかを調査していく。

2　調査方法

2.1　Corpus of Late Modern English Texts 3.1（CLMET 3.1）

今回用いたコーパスは Corpus of Late Modern English Texts（CLMET）の version 3.1 である。その概要を述べると、CLMET 3.1 はベルギーの KU Leuven（ルーヴァン・カトリック大学）に所属する Hendrik De Smet が中心となって編纂したコーパスで、その名の通り後期近代英語の研究に資することを目的としている。表 1 からわかるように CLEMET 3.1 は 1710 年から 1920 年までを対象とし、これを 70 年刻みで 3 分割して各時代が約 1,150 万語から 1,300 万語になるように構成されている（句読点を除く）。また、各時代

表 1　CLMET 3.1 の構成[1]

PERIOD	#authors	#texts	CLMET 3.1 (all)	CLMET 3.1 (excl. punct.)
1710-1780	51	88	12,155,135	10,460,119
1780-1850	70	99	13,268,542	11,473,445
1850-1920	91	146	14,834,182	12,942,471
TOTAL	212	333	40,257,859	34,876,035

表 2　CLMET 3.0 と CLMET 3.1 のジャンル別語数[2]

GENRE :	CLMET 3.0			CLMET 3.1		
	1710-1780	1780-1850	1850-1920	1710-1780	1780-1850	1850-1920
Narrative fiction	4,642,670	4,830,718	6,311,301	5,405,645	5,780,352	7,561,339
Narrative non-fiction	1,863,855	1,940,245	958,410	2,145,946	2,261,485	1,097,487
Drama	407,885	347,493	607,401	523,318	441,040	763,352
Letters	1,016,745	714,343	479,724	1,208,219	842,795	554,046
Treatise	1,114,521	1,692,992	1,782,124	1,263,090	1,927,272	2,030,210
Other	1,434,755	1,759,796	2,481,247	1,635,846	2,047,513	2,851,805
TOTAL	10,480,431	11,285,587	12,620,207	12,182,064	13,300,457	14,858,239

の作家数は 51 から 91、テキスト数は 88 から 146 と幅広く、特定の作家や作品による偏りを防止している。表 2 は CLEMET 3.1 の構成をさらに詳しく示したもので、Narrative fiction 以下 6 種類のテキストジャンルからなり、それぞれのジャンルは時代ごとに表に記された語数からなることがわかる。なお、このコーパスに加えられたテキストはすべて *Project Gutenberg, The Oxford Text Archive* などの public domain からダウンロードされたものである。

2.2 コーパスの検索

前回の研究、大津（2019）においては Parsed Corpus of Early English Correspondence（PCEEC）を用い、最も口語に近い使用域の特徴を示すという私信での調査を行った。今回も前回の調査との連続性を鑑み、CLMET 3.1 のテキストジャンルのうち同じ私信である Letters を用いるとともに、用例数を増やすため口語的であると考えられる Drama も検索対象とした。検索に際してはコンコーダンサーの TXTANA を用い、promise をキーワードとして、ワイルドカードを利用してすべての屈折形を含む用例の検出をした。検出された全用例の中から目的語を伴うものだけを抽出し、各用例に対して、年代、補文の種類（不定詞節か that 節か）、目的語の後の挿入句の有無、時制、命令文か否か、テキストジャンルなどのパラメーターに関する情報をカード型ソフトウェア（ファイルメーカー Pro）に入力していった。なお、前回と同様に、主節の主語と補文節の主語が異なる場合は不定詞節と that 節の交替が不可能なので対象から外した。また、これも前回と同様に promise が分詞になっている場合も対象から外した。

3 調査結果

3.1 年代別分布

表 3 に that 節と不定詞節の年代別分布を集計した[3]。前回の研究、大津

表 3　that 節と不定詞節の年代別分布

年代	(a) that 節	(b) 不定詞節	合計 (a+b)	(b)/(a)+(b)(%)
1710-1780	12	14	26	54
1780-1850	1	6	7	86
1850-1920	7	8	15	53
合計	20	28	48	58

(2019) では、1640-1710 における不定詞節の比率が 81% であったのに対し、この表では 1710-1780 における同比率は 54% となっており、不定詞節の比率が大幅に減少している。この時代だけでは用例数が少ないので別の時代も加えた後期近代英語期全体における不定詞節の比率は 58% となり、後期近代英語期全体と初期近代英語末期とを比較した場合、「promise + 目的語」に続く補文節は前者において不定詞節が相当後退した可能性がある。可能性がある、としたのは、大津 (2019) でも今回の研究でも共通して私信をコーパスとして使用しているが、両者の語数に大差はないものの、前者のほうが私信の筆者数とテキスト数が圧倒的に多く[4]、また、今回の研究には Drama も検索対象に加えているため、一列に比較することが難しいためである。ただ、同じ口語的ジャンルのテキストにおいて後期近代英語期に「promise + 目的語」に続く不定詞節が大幅に減少した可能性があるということは、大津 (2019 : 59) で「2000 年前後から... promise + 目的語 + to 不定詞」の形をとる構文を容認しない母語話者が多いことが指摘され始めている」と述べた傾向の萌芽が 2000 年よりもずっと以前に始まっていたことを示唆するものである。以下のセクションでは後期近代英語期にどのような条件下で that 節あるいは不定詞節が用いられるかを観察しながら、不定詞節減少の原因を探りたい。

3.2　目的語と補文節の間に副詞類がある場合

大津 (2019) において、統計的有意性は認められなかったが、promise の目的語と補文節の間に副詞句や副詞節の挿入がある場合は不定詞節が 60%

表4　目的語と補文節の間における副詞類の有無の影響

副詞類の有無	(a) that 節	(b) 不定詞節	合計 (a+b)	(b)/(a)+(b)(%)
有	8	4	12	33
無	12	24	36	67
合計	20	28	48	58
合計	20	28	48	58

の用例で使用され、挿入がない場合、不定詞節は75%の比率で結果が出た。副詞句や副詞節といった副詞類の挿入は文の複雑さを増す要因であり、promise と補文節とのつながりを明示するためには that 節が好まれるはずであるのに、60% という過半数以上の比率で不定詞節が用いられているのは初期近代英語期におけるその勢いの強さを示唆するものと考えうる。それでは今回の調査では副詞類の挿入の有無によって節の選択はどのような分布を見せるあろうか。表4を参照されたい。

表4は副詞類の挿入がある場合は不定詞節の比率は33%、挿入がない場合は不定詞節の比率は67% であることを示している[5]。この結果を初期近代英語期を調査した大津（2019）と比較すると、挿入がない場合は初期近代英語期の75% より8% 少ないだけであるのに、挿入がある場合は初期近代英語期の65% よりも32% も減少しているのである。つまり、後期近代英語期では初期近代英語期に比べて、副詞類の挿入の有無による影響が格段に大きくなっており、挿入がある場合には不定詞節が選ばれる比率が大幅に減少しているのである。次に挿入がありながら不定詞節を選んでいる4例を挙げてみる。

（2）I promised you in my last letter to send you the event of yesterday. (CLMET 3_1_1_44)

（3）I will cheerfully promise you, however, to be 'bound by no words.' (CLMET 3_1_1_185)

（4）Now promise me dearest, dearest－not to trifle with your health.

(CLMET 3_1_1_185)

(5) Besides I have promised your, −and sure I may add, my charming friend, Mrs. V−, to pay her a visit in Ireland. (CLMET 3_1_1_37)

上の4つの例から明らかなように、挿入されている要素は (5) を除いていずれも短い前置詞句、副詞、名詞であり、次の初期近代英語期の例のように副詞節の例はない。

(6) I promised you when you went out of Towne to giue you the first news of the Battell betwixt the Duke of Loraine and Crequy which was then expected. (大津 (2019) の (14))

例外である (5) にしても、ダッシュで囲まれた部分は "your charming friend" と言いかけたところを "my charming friend" と付け足すのが目的で、主節につながるのは明らかなため、それが主節あるいは補文節のいずれを修飾するか接続詞 that によって明示する必要性がないのである。

(2) から (5) のように短い副詞類等の挿入とは異なり、次のように副詞節の挿入があるケースでは that 節が用いられているのである。

(7) He promised the Duchess of Kendal, that if she survived him, and it were possible for the departed to return to this world, he would make her a visit. (CLMET 3_1_1_44)

また、次のように短い副詞類の挿入でも that 節の例が複数見られる。

(8) Mr. Harris had promised, the same morning, that he would be guided by Mr. Sheridan 's opinion. (CLMET 3_1_1_70)

(9) She promised me at Dalswinton that she would do me the honour to introduce me at Tinwald. (CLMET 3_1_2_110)

このように、初期近代英語期よりも後期近代英語期において、副詞類の挿入がある場合、不定詞節の使用が激減したということは、2000 年前後に指摘され始めた不定詞節を避けるという傾向が既に後期近代英語期にその兆しを見せていたと言えるのではないであろうか。つまり、2000 年前後の指摘は副詞類の挿入がない場合に関するものであるが、後期近代英語期においては、Rohdenberg（1995）のいう Complexity Principle が働く副詞類の挿入がある場合から不定詞節が用いられにくくなり始めた可能性があるということである。

3.3 that 節の選択を導く他の条件

用例数としては少ないのであるが、抽出された例文すべてに目を通していく過程で that 節の選択を促していると思われる条件が他にもあったので触れておきたい。

that 節を選ぶ条件として promise が遂行動詞として用いられる場合がある。この用法は主語が一人称、主節の動詞は現在時制の平叙文となる次のようなケースである。遂行動詞としての promise の用例は 7 例あったが、5 例が that 節（定形節）を取る。うち 3 例を次に挙げる。

（10）I promise you I will be very good.（CLMET 3_1_1_44）

（11）I promise you I will never enter into a controversy with them.（CLMET 3_1_1_44）

（12）I promise you I won't move a step till I have your assurance that your split with Madame de Chaumié is a mortal one.（CLMET 3_1_3_265）

遂行動詞としての promise は一種の宣誓を行っているので、定形節の方が宣誓内容を明示的に表すことができるのであろう。

4　まとめ

今回の調査は、2000年前後を境に動詞 promise が目的語をとる際に続く補文節として不定詞節を避け、that 節が好まれる傾向が生じてきたという最近の報告を受け、「promise＋目的語」に続く補文節の変遷について、その最初期から洗い出すことを目的とした研究の一環をなす。前回の大津（2019）では初出例が認められる後期中英語期から初期近代英語期を対象とした調査を行い、①「promise＋目的語」に続く補文節は最初期から不定詞節が過半数を超えるくらい高い頻度で現れる、②不定詞節の頻度はその後も増加し続け、初期近代英語期末（1710年）までに8割以上を占めるようになる、③これらのことから、この時期、promise はいわゆる complement shift の波に乗っており、母語話者において不定詞節の容認度は高かったものと推測される、などの結果を得た。続いて行った今回の調査で分かったことは不定詞節の勢いの鈍化である。例えば1850-1920における不定詞節の比率は58％と初期近代英語期の8割以上に比べ減少の兆候を示している。そして見逃せないのが、副詞類の挿入がある場合の不定詞節の大幅な減少である。これは副詞類の挿入という不定詞節が使いにくい環境において、言い換えれば不定詞節にとって苦手な環境から不定詞節を避ける傾向が既に後期近代英語期から始まっていたと推察できる。

以上が今回の研究で分かった要点であるが、大津（2019）と同じく私信をコーパスとして用いたとはいえ、用例数を増やすために私信と同じく口語的なテキストとして演劇（Drama）も加えており、コーパスの均質さの連続性に不安が残る。また、抽出できた用例数も前回の二分の一弱である。しかし、コーパスは口語的なものに統一しているし、用例数も極端に少ないわけでもない。統語の歴史的変化はそれが起こりやすい環境からまず始まるというのは他の構文でも見られることであるが[6]、今回、副詞類の挿入という不定詞節が使いにくい環境において不定詞節を避ける傾向が観察されたのもそ

のような現象のひとつとして提案したい。もちろんそれを実証するためにはさらに別のコーパスを使った詳細な調査が必要となろう。

また、今後の課題として、今回調査した時代の続き、つまり 1920 年以降における「promise＋目的語」に続く補文節の変化を今後の課題として研究を継続していきたい。

注

1　表 1 と表 2 は CLMET 3.1 のパッケージに同梱されていたマニュアルから抽出したものである。

2　表 1（CLMET 3.1（all））と表 2 では各年代の語数に若干の差異があるが、これについては同梱のマニュアルに説明がなかった。

3　表 3 は Letters と Drama の数字を合算したものである。それぞれを分けると下記の通り。

4　PCEEC は 1410 年から 1681 までの間に 666 人によって書かれた 4970 通の私信からなる総語数が約 220 万語のコーパスである。

5　カイ二乗検定の結果は 5% で有意水準にある（$\chi^2(1) = 4.11429$, $p = 0.0425225$）。期待値は 5 以上であるが、実測値が 5 未満のセルがあるのでフィッシャーの正確確率検定を用いたところ両側検定で有意差なしであった。

表 5　that 節と不定詞節の年代別分布（Letters）

年代	(a) that 節	(b) 不定詞節	合計（a＋b）	(b)/(a)＋(b)(%)
1710-1780	3	5	8	63
1780-1850	0	2	2	100
1850-1920	7	7	14	50
合計	10	14	24	58

表 6　that 節と不定詞節の年代別分布（Drama）

年代	(a) that 節	(b) 不定詞節	合計（a＋b）	(b)/(a)＋(b)(%)
1710-1780	9	9	18	50
1780-1850	1	4	5	80
1850-1920	0	1	1	100
合計	10	15	24	63

6　例えば Rohdenburg（1995）は初期近代英語期を通して、「動詞＋目的語＋that 節」の構造をとっていた一連の動詞が不定詞節を取るようになった際、強制力の強い動詞（order など）からその変化が起こったことを実証している。

参考文献

De Smet, Hendrik, Susanne Flach, Jukka Tyrkkö & Hans-Jürgen Diller（2015）*The Corpus of Late Modern English*（*CLMET*）, *version 3.1 : Improved tokenization and linguistic annotation.* KU Leuven, FU Berlin, U Tampere, RU Bochum. Available fromhttps : // perswww.kuleuven.be/~u0044428/clmet3_1.htm.

久野暲・高見健一（2017）『謎解きの英文法　動詞』くろしお出版.

久保田正人（2001）「promise の意味と構造」『言語文化論叢』第 9 号：39-55. 千葉大学.

西原俊明（2000）「主語コントロール動詞について　－promise, beg, ask を中心として－」『長崎大学教育学部紀要－人文科学－』No.61 : 47-56.

大津智彦（2019）「初期近代英語期における「promise＋目的語＋to 不定詞」と「promise＋目的語＋that 節」の交替について」『英米研究』第 43 号：59-71.

Parsed Corpus of Early English Correspondence, text version. 2006. Compiled by Terttu Nevalainen, Helena Raumolin-Brunberg, Jukka Keränen, Minna Nevala, Arja Nurmi and Minna Palander-Collin, with additional annotation by Ann Taylor. Helsinki : University of Helsinki and York : University of York. Distributed through the Oxford Text Archive.

Quirk, R. et al.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.

Rohdenburg, Gunter（1995）"On the Replacement of Finite Complement Clauses by Infinitives in English." *English Studies,* Vol.4 : 367-388.

Rohdenburg, Gunter（2006）"The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System." Syntax, Style and Grammatical Norms : English from 1500-2000 ed. by Christiane Dalton-Puffer, Dieter Kastovsky, Nikolaus Ritt, and Herbert Schendl, 143-166. Bern : Peter Lang.

Takaie（2002）"A Trap in Corpus Linguistics : the Gap between Corpus-based Analysis and Intuition-based Analysis." In T. Saito, J. Nakamura and S. Yamasaki（eds）*English Corpus Linguistics in Japan.* Amsterdam : Rodopi.

鷹家秀史・林龍次朗（2004）『103 人のネイティブスピーカーに聞く生きた英文法・語法』旺文社.

高見健一（1998）「John promised Mary to leave. は「正用法」か」『英語青年』第 144

巻　第4号：200-201.

Visser, F. Theodorus（1973）*An Historical Syntax of the English Language.* Part III, second half. Leiden : Brill.

吉川寛（1985）「「Promise」考」『国際関係学部紀要』1号：105-113. 中部大学.